

(6) 特別支援教育実践研究センター

① 特別支援教育実践研究センター

ア 設置の趣旨（目的）及び組織

特別支援教育実践研究センターは、「特別支援教育における実践的な教育及びその研究の推進を図るとともに、特別支援学校等の教員の研修を行うこと」を設置目的にしており、臨床（教育臨床、教育相談）、研究、研修（指導者研修、教材・教具の開発）の3部門5領域の機能を有する。

構成員は、専門職学位課程発達支援教育実践研究コース特別支援教育領域教員全員がセンター兼務教員となっており、村中智彦（教授：センター長）、大庭重治（教授）、笠原芳隆（教授）、河合 康（教授）、藤井和子（教授）、八島 猛（教授）、池田吉史（准教授）、小林優子（准教授）、佐藤将朗（准教授）、関原真紀（准教授）、坂口嘉菜（講師）の11名である。

イ 運営・活動の状況

臨床活動（教育臨床）では、大学院修士課程発達支援教育コース特別支援教育領域（令和3年度までの旧課程）の「課題研究フィールドワーク（教育臨床実習）」及び「応用教育臨床実習」（いずれも視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、言語障害、重複障害、発達障害の8障害に対応）を本センターで実施した。これらの授業では、VTRを始めとする各種教育器機を活用して、センターに来所する障害のある子どもの検査・教育的診断、教育プログラムの作成、指導、評価について、その原理と技術を指導した。また、個々の臨床の都度カンファレンスを実施し、VTR記録等を用いた臨床内容の分析を行い、院生に対して臨床に関する議論の場を提供した。また、本センターにある教材や検査用具、施設設備を活用して、特別支援教育領域の開講する臨床実習以外の授業科目「障害者心理検査法」「特別支援教育研究法」「実践場面分析演習：特別支援教育」等の13科目をセンターで実施した。

臨床活動（教育相談）では、子どもと保護者、学校等の担当者を対象に、地域の障害のある子どもの教育診断、発達援助、日常生活の指導・援助について、面接相談や各種検査、継続指導、経過観察を行った。この臨床活動（教育相談）においては、センター兼務教員と特別支援教育領域を中心とする大学院生のチームにより、発達、心理、知覚・認知、運動、コミュニケーション・言語、視覚、聴覚などの検査を実施して総合的な教育診断を行い、障害のある子どもの療育支援、学習支援を実施した。また、障害のある子どもに関わる人々の環境の調整、地域の医療・相談・教育機関との連携にも努めた。

研究活動では、センター兼務教員が行っている研究プロジェクトとして、科学研究費採択事業12件、学内研究プロジェクト1件を実施した。また、障害のある子どもの教育実践に関する総合的な研究成果を、上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要第29巻において発表した（令和5年3月刊行）。なお、本巻に掲載された論文の電子ファイルを本センターホームページ及び上越教育大学リポジトリに公開した。さらに、特別支援教育に関する情報の共有と発信を図ることを目的として、特別支援教育実践研究会を設立し、令和4年度は協働研究員登録数が合計37人であった。そして、学校現場や本センターにおける指導実践とその成果を発表する場として、令和5年2月1日（土）～2月5日、オンデマンド方式により、第11回実践研究発表会を開催した。なお、本発表会は、令和4年度実践場面分析演習「特別支援教育」及び令和4年度学校支援フィールドワーク・リフレクション発表会を兼ねて開催され、23件のポスター発表を行い、70名が参加した。

研修活動では、特別支援教育において指導的立場にある現職教員、実践者、研究者、福祉関係施設の指導者を講師として招きセンターセミナーを実施した。センターセミナーは、地域の特別支援教育関係者への専門的知識や内外の最新情報の普及・啓発による地域貢献的役割の他に、特別支援教育領域大学

院生に対し、大学院のカリキュラムを超えた幅広い知識や情報の獲得を目的としている。令和3年度は、1回のセミナーを開催し、第103回は国立障害者リハビリテーションセンター病院 病院長 西牧謙吾氏を講師に招き「医療者からみた特別支援教育の課題と展望」（令和5年2月5日（日）：参加者92名）の内容で実施した。

その他、地域支援・連携活動として、1件の大学研究プロジェクト「上越地域難聴幼児支援事業（代表：小林優子）」に加え、本学附属通級指導教室を生かした現職研修や教員養成に関する事業も継続されている。また、新潟県内各特別支援学校評議員、新潟県特別支援学校教職員研修会講師等の活動、及び外部機関に対しセンターが所有する検査用具の貸出を随時行った。

ウ 優れた点及び今後の検討課題等

当センターで行っている臨床活動は教育活動とも密接に関わっており、これにより特別支援教育領域の大学院生の実践的指導力を培うことに直結している。具体的には教育相談のため来所する子どもたちの指導原理、技術を教員の指導のもとで習得することができる。また、研究活動として、教育相談によって得られた成果を国内外に発表している。研修活動では、新潟県内における特別支援教育の専門機関として最新の知見を提供する役割を果たしている。今年度は昨年度に引き続き特別支援教育実践研究会第11回実践研究発表会を実践場面分析演習等と兼ねて開催し、地域における情報交換・情報提供の場を提供する取り組みを実施した。今後も先述した諸活動をさらに発展させ、近隣の教育・行政・福祉等の関連機関との連携を充実させていくことが課題である。

さらに、令和4年度、上越教育大学ミッション実現加速化経費「インクルーシブ教育の地域連携機能の強化に向けた環境整備」が採択され、センター設備として、多角的行動解析システム、行動観察分析システム及び生理指標測定機器が設置され、これらを最大限に活用することが求められている。具体的には、センターの機能を活かして、兼務教員が担当する特別支援教育領域における「学校支援プロジェクト」の一環として、特に、実践の査定（アセスメント）・評価、遠隔や地域連携にもとづく学校支援や教員研修を充実させるための施策を講じることが急務な課題である。

② 運営委員会

ア 設置の趣旨（目的）及び組織

i) 組織設置の趣旨（目的）

特別支援教育実践研究センター運営委員会では、（1）特別支援教育実践研究センターの運営に関する事項、（2）特別支援教育における教育実践の在り方の研究及び具体的指導技術の開発に関する事項、（3）特別支援教育における教育実践の企画及び運営に関する事項、（4）学生の実践指導に関する事項、（5）その他特別支援教育実践研究センター長が必要と認めた事項を審議する。

ii) 組織の構成及び構成員等

令和4年度特別支援教育実践研究センター運営委員会構成員は、センター兼務教員11人及び心理教育相談センター長である。

イ 運営・活動の状況

i) 委員会等の開催状況

令和4年度においては、特別支援教育実践研究センター運営委員会を次のとおり3回開催した。

- ・ 第1回 令和4年4月8日（金）から4月18日（月）書面審議
- ・ 第2回 令和4年8月1日（月）から8月8日（月）書面審議
- ・ 第3回 令和5年3月3日（金）から3月8日（水）書面審議

ii) 審議された主な事項

第1回運営委員会では令和3年度における特別支援教育実践研究センターの運営状況に関する自己点検・評価書、第2回運営委員会では令和3年度事業報告、同決算報告、令和4年度事業計画、同予算計画、令和4年度紀要編集委員の選出及び編集幹事の委嘱について協議した。また、第3回運営委員会では、令和5年度予算要求・要望、特別支援教育実践研究会第11回実践研究発表会と第103回センターセミナー及び特別支援教育実践研究センターの設備更新について報告を行った。

iii) 重点的に取り組んだ課題や改善事項及び前年度の検討課題への取組状況等

R3年度より継続して検討されていた特別支援教育実践研究センターと地域の関係諸機関との協働的課題解決システムの構築や大学のセンター的機能を確立するための将来構想の策定について重点的に取り組んだ。また、同センターが竣工後30年以上を超え、臨床・教育・研究・研修活動の拡充に必要な施設・設備の更新や改善についても検討した。